

原子核談話会通信

No.28 1956・2・5

目次

I 関東原子核談話会記事 (1955. XII. 9)	1
II エレクトロニクスに関する菊池提案 (1955. XII. 24)	3
III ロチエスター留学生応募結果 (1956. I. 15)	4
IV 湯川、石川両原子力委員との懇談会 (関西) (1956. I. 24)	4
V 原子力研究所にたいする駒形氏の案 (1956. I. 25)	9
VI 学術会議原子力特別委員会委員の推薦投票結果 (I. 28)	13
VII 東大原子核研究所人事公募お知らせ	14

原子核談話会事務局編輯

c111-024-051

I. 関東原子核談話会記事

昨年12月9日立教大学に於て関東談話会が開かれ活発な討論が行なわれた。以下にその大要を報告する。

出席者 21名。席長、田嶋氏であった。

第1に核研の本年度実施計画について散乱槽、同位体分離、*Electronics*、*cyclotron* に分けて、11月関西で行われたと同様の報告があった。

第2に核研の来年度計画について、菊池氏より問題提起と報告があった。主に次の点である。

- (i) 共通設備及び低エネルギー部門の充実
- (ii) 講座削減問題 (12講座が8講座になる恐れがある。)
- (iii) 原子力局についての報告 (原子核研究費の査定まで行う恐れがある)
- (iv) 高エネルギー加速器部門と宇宙線部門のいづれを優先すべきかの問題

これに対し、

「核研が低エネルギーと宇宙線の部門だけでは核研の名目が立たない」(田嶋氏)「低エネルギーも育たない状態になっては核研の名目がつぶれる」(宮本氏)等の意見が強く、高エネルギー加速器を低エネルギーに次いで優先にするという考へが支配的であった。しかし「研究者の中で対立して与えられたものの取り合いにエネルギーを消耗しないで、外に対して要求して行く必要がある」(服部氏)「互にサポートし合って行くべきで、対立が外にあらわれてはいけない」(小川氏)「予算の一部を宇宙線にまわすことで両立する道があるのではないか」(中川氏)等の意見が出された。又「低エネルギーの1.5講座を理論と *chemist* と同位体分離とに細切れに分けるのはよくない」(百田氏)という考えも出された。

第3に原子力問題にうっかり中川氏から立教の原子炉問題に関する報告があった。その主旨は「アメリカの聖公会という宗教団体の *charity* として寄贈されるもので、未だ何ら確定的なものではないが、立教大学に来る可能性も強い。その際維持費など問題もあるが、寄贈者側からは何らの研究上の制限もない。たゞ国内法や双務協定の制約はうけると思われる。立教内での大体の意見では、これを受け入れて民主的に運営して行きたい」ということであった。

第4に“原子力研究と原子核研究者との関係”について13日の特別委員会とも

關聯して佐治氏から提案があって、先づ菊池氏の原子力研理事問題が討論されたが、「原子力に関しては例えば菊池先生のような人が上から入って行って、研究者の意見が反映するような方法が一番よいと思う。余り負担にならないという条件の下で菊池先生の理事就任には賛成である」(田嶋氏)「現在の情勢の下では原子核研究所長の理事就任は止めた方がよい」(服部氏)「就任をことわったとき、後任を誰かという話しはなかった。原則的に原子核研究所長は止めた方がよいという点を納得して止めたわけではない。実験関係の特別委員の返事では $\frac{1}{3}$ は就任賛成、 $\frac{2}{3}$ は原則的に反対であったが、残りの $\frac{1}{3}$ は就任すればごたごたが起るから悪いということ。私もそう思ったから断わったのである。今後このような問題が起ったとき参考になるから *discussion* しておきたい」(菊池氏)との発言があったが、明白な議論にならないまま議事は「原子力特別委員」の方へうつった。大塚氏より原子力特別委員選出の主旨の説明があり、その大要は「原子力研究の現状では学会会議はかなり無視されている。原子力問題委員会は原子力の専門家の集りではなく、学会会議が実力をつける意味で実際原子力に近い科学技術の人達で委員会を作ることが、総会できまった。12人の世話人が人送することになっており、このうち原子核の理論と実験の人達が世話人の要請により特別委員会でえらぶ」ということであった。「どういうことが議題になり、どう運営されるか」(田嶋氏)「原子力研究所との関係如何、もっと広い範囲の人を含む力のある委員会を作るべきではないか。学会が *neglect* されている現状は自己批判すべきである」(坂井氏)「39委員会との関係如何、どうも性格がはっきりしない。バスに乗りおくれでは困るというようなものではこまる。今度送ぶのは原子核の専門家という意味ではないか」(菊池氏)「委員会がどのような性格をもつかははっきりしない現状である。予算の配分などを行いたい考えもあり、又これをもとにして学会なども作って行きたいという考えもある」(大塚氏)「この委員会の性格がはっきりするまでは委員の任期を短くして始めた方がよいのではないか」(田嶋氏)「原子核の人をもっと増加して研究者の意向の反映するような委員会にしたい」(小川氏)等の意見が出された。

この討論の途中に於て、百田氏から「原子核研究者は原子力問題を現在どう考えているのか」という問題が提起された。

これに対して「三原則は額面うたわれているが実際は満たされていない」「三原則が満たされていない現状で原子力に参加することは現在多数の裏力で禁ぜられているわけではない」「三原則をかって強力に主張した人々が最近ではあきらめてし

まったのか」「三原則を提出した頃の原子力反対から現在の肯定的態度の間に *gap* がある。委員会に参加する前にその点を解決しておくべきではないか」「要求が通らないとなると、自分の象牙の塔にこもって仕事をすればよいという考え方はよくない。特に理論家に多いのではないか」「現在の情勢に満足しない人も中に入って行って努力しなければ歴史を進められないのではないか」「始め三原則を持出した時、情勢がその線にそつて進めばよかったが、不幸にして現在のような状態になったのであって、現在では三原則のようなひちめんどろなものなしで進もうという考え方も出て来たのではないか」「立教にも同じ悩みがある。意見は異っても、力に関係する人々を皆が *support* してほしい。核研の人々も、自分は悪風状態にいるつもりで、対岸の火災視しないでほしい」等々中には「今までの不満をぶちまけた」という点もあり、議論はつきなかつたが時間が遅くなったので散会された。(文責・松田)

II. エレクトロニクス研究を盛にするための提案

昨年暮、核研菊池所長から次のような提案がありましたのでお知らせ致します。エレクトロニクスを主体とした測定装置の研究の重要性については皆さん充分にお認めになっていると思います。

現在各所の研究室で測定器を整備するについて、いろいろ御苦心をされた点などがそのまゝになるのは甚だ残念で、皆でそういう点を話合うことが是非必要であると思います。又、作られた測定器、或は購入された測定器の性能等に関する問題を始め、当事者が寄合つて話合う機会があれば非常に有益ではないかと思ひます。こういう問題についてどうしたら一番よいかということ。核研において、12月5日に、三輪、山崎、田島、森、熊谷、林、眞田、庄野、有住氏らと話合いました結果、次のようなことを計画致しました。

- (1) 次の仙台での学会に特にエレクトロニクスを主体とした測定器のシンポジウムを申込み、上記のような問題で話合うこと。
- (2) シンポジウムを盛んにする世話を関東では、木村(一治)、山崎、田島、三輪、百田、熊谷、林の諸氏におねがいする。関西方面は、いずれ有住さんが、京大、阪大の方々と相談して意見をまとめる。
- (3) 事務的のセンターは、核研が引受ける。

(4) 次のシンポジウムをまたず、関東、関西、別々に、実際やっている人々の間で話合う機会をつとめて作ること。

御意見をお寄せ下さい。

以上。

12月24日

原子核研究所

菊池正士

Ⅲ. ロチェスター留学生応募結果

下記4名の方が応募されました。

三宅弘三 (京大) 浅見明 (東大)
武谷汎 (京大) 山田隆治 (東大)

Ⅳ. 湯川、石川、両原子力委員との懇談会

1月24日, 1.45 p.m. 於. 基研

出席者; 湯川, 石川, 植村 (経団連副会長).

素粒子 (京都近辺及び名古屋), 原子核実験 (京都及び大阪)
工学部, 農学部, 生物学, その他, 約100人.

湯川氏挨拶 (要旨)

原子力は政界, 財界, 学界が手をつないで行くことが必要と思う。

私は今まで原子力から逃げるばかり考えていたが, 今後出来るだけ日本の色色の方面の人の意見を聞いて, 国民全体がこぞって明るい正しいものにして行きたい。

幸い, 石川氏も喜んで皆の意見を聞き, 構想も話して下さいということなので, 何人でも云って戴きたい。

木庭氏 (基研教授) が意見をまとめて下さっているのので, 先づどのようなことを伺い, 希望意見を云って下さい*。

<木庭氏> 忙しい所をおいで下さって有難う存じます。最初に伺いたいことは

原子力の発展は重要な意味関係をもっていて, 力研に行きたい人もあるので原子力委員, 原子力研究所, 原子力局がどのような関係でいくのが, 又学術会議に原子力問題委員会, 原子力特別委員会などの関係は, どのようにして反映されるのか, 次に力研と力委とがどのような構想でいくのか, 新聞では力研は, 国立でなし公社で行くというのはどのような意図なのか, 公社なら, 身分保証がどのようになされるのか, 力研での研究結果は公表されるのか, 禁止があるのか, 力研の人事の問題は現在及び将来どのようにして行われていくのか。

<石川氏> 私は原子力にタッチすることは夢にも思わなかった。私は70才になる。経団連で10年やってきた。しかし, 万更, いんねんのないことではない。私は, 始め天文をやりたいかったが, 私の父は明治17年から化学会社をやっているが, それが私を育ててくれたのになぜ化学をやらないのかといわれて, 化学をやった。力と天文とが, 関係ある。日航で始めてアメリカへ行った。カリフォルニアの *Bevatron* をさかぬ氏が見せるということでもってきた。とえらいことをやっている。日本がたらくてはいけないというのを考えた。昨年, アメリカへ航空工業をみに行った。日本はアメリカのような資本主義ではだめだと思った。そして, 完全雇用, 輸出等を基本的に考えてる5年計画を考えた。それをアメリカの要人に解きにいったが新聞記者をさけるために原子力をみに行くという名目でいった。

そんなことでどうしても原子力をみに行くということになって *Strauss* にも会い シーウォルフやブルックヘブンを見て来て, 日本にかえって来て, 原子力の方面に行くことになった。力研をどうしたらよいか, 原子力工業を起すのにどうしたらよいかをアメリカでみて来た。私はどうしても原子力にはふむきだといっていたが皆がすすめるので原子力委員になったというわけである。

原子力は, 各専門分野の人が共同してやらねばならない。分散していてやっけては駄目で, 協力してやっていくのがよい。これには金がいるが, 先づ一つ立派なものをつくる必要がある。現在の構想は研究中である。平和利用準備会の, 総合部会でパイルの型がきまっていたから将来はとも角, 始めは *water Boiler* と CP-5 を入れる。将来はその時の進捗状態で決める。力委と力局と力研は三位一体で行く, 力委, 力局, 力研とが話し合っていく。具体的にどうやるかは今問題にしている所である。大体の意見の一致

では、国立では駄目で、公社のようなものにする、ということである。政府の金を出す方は *control* したいと考えている。定員の問題は、研究の方向がきまってくれば、定員を定めるのもよいが、現在は生れつゝある時なので定員でしぼられることは困る。予算に対しては、*flexibility* をもつことが必要だ。急いでやって、2, 30年おくれをとりにとすには、*flexible* でなければならない。予算のわくはあっても自由に使えること。又、電力会社の増水期の利益を出させるにも、国立にすると寄附は一ぺんに落されるから、これを公社のようなものにしなければならない。電力会社でも各種の技術者がこれに参加してやれるようにしたい。給料は、いい人を引きぬききてもらえる様にしたい。

〈湯川氏〉 学術会議での話では必ずしも国立でない方がよいとは云っていない。*flexible* があるとすると国立でもよい。

〈石川氏〉 給料は政府は一級だけ上げるといっている。

〈湯川氏〉 国立にして *flexibility* にしてないのならだめだが、*flexibility* があつたら国立でもよい、というのが学会の大体の意見のようである。

〈石川氏〉 各会社から、手弁当でもきたい人がある。それは国立ではいろいろな除外例をつくらなければならない。学会もその点を研究してくれなくてはならない。苦勞してやらなければならないから民間会社の金でも入れるようにしたい。今募集しているが奉給がきまらぬから皆さんに御迷惑をかけているが、それがきまったら選考委員会をつくってやりたい。

〈湯川氏〉 募集が一月一杯となっているので迷っている人も多い。今の募集した人はどうなるのか。

〈石川氏〉 今入った人は、これから決まる力研に入ることにしたい。今までいる人は、ある種のたいぐうをしている。これを覚悟の上できていただいている。しかし、2, 3ヶ月してかえるようでは困る。身分保証は国立と同じと考えてほしい。

〈湯川氏〉 石川さんの意見をきいたから皆から意見をいってくれ。

〈木村氏〉 力研の構想はどうなのか、相当の年配(助教授的な人)の人が、行くのにこの構想がわからぬと困る。

〈石川氏〉 いろいろあるが、どの部門でどういう人が、どんなたいぐうをしたらよいか *ranking* のことがもづかしいので、*ranking* のことは後できめたい。たいぐうのことは早急にきめる。

〈養学部の人〉 私達の所には募集がきていないが、こんどの募集は基礎だけなのかアイソトープの応用などもあるのか。今の所は、パイルに限られているが、来年度からそのような方面の人もとりたい。

〈素粒子の人〉 募集について、力研で発電を急いでも他の国からもってくるには秘密等があるので、我々の物にするには基礎的なことからやらねばならないと考える。それで基礎的部門を入れていただきたい。募集は一月末になつているので迷っている人が多い。入っても自分の素人の所にまわされても困る。白書をはつきりさせて募集されたい。

〈石川氏〉 各大学でやれぬ基礎的なものはぜひやりたい。しかし当面は急ぐし予算も少いから。

〈藤本氏〉 当面は基礎は問題にしないのか。

〈石川氏〉 来年はやる。

〈湯川氏〉 今の質問はアメリカからもらってくるものに関してではなくて、日本でもっと基礎的な融合反応も研究する必要性をもっていると思う。

〈石川氏〉 私もその方に行くべきだと思う。

〈湯川氏〉 これは、金のかゝるかゝらないということではなくて人がいなくて駄目だ。大学ではやれないのだから。

〈藤本氏〉 始めから、基礎と発電とを平衡に進むべきだ。

〈石川氏〉 ごもつともである。

〈素粒子の人〉 力研はアメリカのもの受け入れではなく基礎的な部門から、きっちりした計画でやれ。

〈柳父氏〉 力委、力研が政治的に中立性が保てるか。

〈石川氏〉 政府が変わっても変わらない。裁判所と同じだ。

〈柳父氏〉 力研の動き方は政府からの働きかけで動いているようだが、私は大学の人間として力研の自主性のあることが望ましい。

〈湯川氏〉 力研の根本方針は力委が決める。

〈石川氏〉 予算目録は力研が出す。力委がそれを政府に勧告する。重大な変更は力委でやる。

〈湯川氏〉 そうでなくては力委の意味がない。次の力委員会では駒形氏らの意見も聞くことになっている。原子力法のことは会相談中である。

〈柳父氏〉 力研は原子力方面の *standard* を決めることが必要と思う。

〈石川氏〉 計器類は電気試験所でやらす。

く藤本氏> 三位一体の話が出たが、学術会議に原子力問題委員会、原子力特別委員会があるが、これは専門家の中から公選でできるものである。このようなものと一緒にやるために四位一体でやって欲しい。

く石川氏> 実業会にもそういうものがあるかもしれぬ。良いものならとる。政府の意見でも悪いものは断わる。出来るだけ皆が相談して立派なものを作ってゆきたい。

く木庭氏> 今日ここにいろいろな方面の専門家が来ておられるのでいろいろな構想を出してもらいたい。

く石川氏> く湯川氏> おいいに結構。

く平尾氏> 核研の研究と力研の研究とは関連してくると思う。力委は、原子核の基礎研究に対しても研究が発展するように助勢してもらいたい。

く湯川氏> 力委はあまりなく力をもって原子力以外のことにも、口出しをしない方が良くと思う。

く山口氏> 日本の技術は他の国のまねばかりして来た。力研は独創的なものがやれるようにすべきだ。

く石川氏> 理くつがわかって日本でもできぬものがある。出来るものは日本でやる。
(文責・中村)

*註 この懇談会の前に石川氏の来られる前に、基研の丸森氏の議長で石川氏に対する皆の意見を整理しておいた。

(1) 原子力局と原子力研究所と原子力委員との関係をはっきりとすこと、及び力委と学界の選出機関(学術会議)との関係はどうか(緊密に関係して欲しいという希望)

(2) 現在及び4月からの研究所の構想(例えば基礎研究としてどんなものを考えているか、又将来の見通し)

i) 現在の力研の運営状況

ii) 何故公社の方がよいとしたか。(吾々は国立の方がよいという意見もある。)

iii) 公社とした場合の身分保障はどうか。

(3) 力研の人事問題を誰が決めるか。

“原研29号”の出されたときのいきさつについて。

(4) その他

i) 研究発表に制限がつくか。

ii) 力研以外の原子力関係の基本的な基礎研究をどのように考えるか。

V. 力研にたいする駒形氏の案

1月18日、私達京都の研究者が基研へ乗り、湯川先生を交えて主として力研の問題について話し合いました。湯川先生は1月18日付で力研所長代理駒形氏あてに下のような質問をお出しになり、駒形氏からは1月22日付で湯川先生へ答が届きました。多くの人達の要望がありますので、湯川先生の御了解を得て、こゝにお知らせいたします。

[問1] 現在確定している研究者のスタッフ。

[答] とりあえず Water Boiler の購入を急ぎますので、1月末まではその準備のためのスタッフを主としていまして、主任研究員級としては、杉本神蔵、西氏です。

所内には準備室を設け(別紙1参照)種々の計画を建てていますことは、学術会議の時申し上げましたが(1月16日に学術会議の問題委(長、伏見)が、原子力委員及び力研関係者を招いて懇談された)室の委員は別紙1の如くでありまして、更にこの中から今般研究所に入られる方、研究囑託をお願いする方があるものと思えます。

尚、準備室の仕事を実際するため一例えば購入機器の仕様書を作る等—若い人を十名ばかり、取敢ず採用しました。

[問2] 研究部門は何と何で、それぞれどの位の人数の採用を考えておられるか。

[答] 昭和32年までの予定として大体次のように考えておりますが、予備がどの程度今後において認められるかにもよるものと思えます。

研究室のみとして

理論物理及び数学	10名	実験物理	25名	電気工学	20名
化学	15名	化学工学	10名	冶金	10名
生物医学	5名	機械	若干名		

で、この他に、実験助手、計算員、製図工などがあります。研究室以外には建設・企画・調査などがあります。

[問3] 研究所では当面の目標(実験炉の建設・運転・利用等)以外の、もっと基礎的な研究をやる余地がどれ位あるか。たとえば、中性子物理の部門と

が、原子核理論の部門があつて、相当自由に研究ができるかどうか。

[答] さし当り仕事としては、別紙2のように考えております。

原子炉建設が当面の目標ですが、基礎部門も重視することは当所の方針の一つでもあります。実際は研究所が軌道にのってから、この方面に力が本当に入れられるものと思います。

[問4] 今すぐ役に立つ人でなくても、経験をつめば役に立つような人も採用されるか。

[答] 研究所の本質上、今すぐ役に立つ人でなくとも、能力・素地のある人ならば勿論よいわけでありませぬ。

[問5] 1人1人が孤立して入るのではなく、何人が一緒になって入り、協力して研究していく可能性はあるのか。

[答] 新しい研究所なので当初から派閥などないようにつとめたく、人員の配置をいたしたく思います。

[問6] 応募者の詮衡はどのようにされるか。(この点について研究者は最も関心をもっている。これについて学術会議の方から学界の意見をきくようにとの申し入れがあつたが、それを尊重するならば、例えば詮衡に関しては、原子力問題委員会にはかつて、専門学者を加えた詮衡委員会を作る等の方法も考えられる。)

[答] 理事・参与等から詮衡委員会を作る予定にしています。

[問7] 研究成果の発表は自由か。

[答] 公社か法人かいづれにしても、それぞれの研究所の場合と同じで、ここで別な研究発表方式を考えねばならぬことはありません。

[問8] 身分の保障はどうか。

[答] 服務規定で定められるものでありますが、その規程も一般と差は格別ないものと思います。

別紙(1)

研究準備室 (敬称略・五十音順)

- 青木敏男 (工業技術院電気試験所)
- 木村道夫 (東京電力株式会社建築課)
- 大山彰 (東京大学工学部)
- 大山義年 (東京工業大学理工学部)

- 斎藤信房 (東京大学理学部)
- 武田栄一 (東京工業大学理工学部)
- 中井敏夫 (工業技術院東京工業試験所)
- 橋口隆吉 (東京大学工学部)
- 久田俊彦 (建築研究所)
- 法貴四郎 (工業技術院電気試験所)
- 矢木栄 (東京大学工学部)
- 山崎文男 (科学研究所)
- 山田太三郎 (工業技術院電気試験所)
- 外に 杉本朝雄
- 神原豊三
- 阿部滋忠

別紙(2)

研究部項目

- 原子炉 {
 - W.B.
 - CP-5の仕様
 - 国産1号炉の設計
 - Exponential Exp. の準備
 - Control System の調査
- 物理及計測 {
 - Van de Graaf の仕様
 - 中性子物理関係測定装置設計及び測定方法
 - Simulator の仕様
 - Detector & Instrumentation
- 化学、化学工業及材料 {
 - Hot Lab の設計
 - Fission Product 分離 } 化学分析装置一般
 - 放射線化学及活性化分析
 - Reprocessing & Waste Disposal 関係調査
 - Fuel Element - 冶金研究装置一般
 - 固体物理関係調査
 - 材料試験機

- 放射線障害 { 環境衛生対策
 気象観測塔の仕様
 健康管理の準備
- 調査 { 動力炉
 Isotope 利用
 Fusion
- 技術工作 { Mechanical shop
 Electronic shop
 Glass work

別表(3)

財団法人原子力研究所機構

総務部

- 秘書課 { 秘書
- 庶務課 { 庶務
- 経理課 { 経理

建設部

- 建設課 { 建築
 土木
 土地

企画部

- 企画課
- 資料課

研究部

- 第一研究グループ (原子炉)
- 第二研究グループ (物理及計測)
- 第三研究グループ (化学、化学工学及材料)
- 第四研究グループ (放射線障害)
- 調査グループ
- 技術工作グループ

Ⅵ 学術會議原子力特別委員会委員の推薦投票結果報告

談話会事務局

先に行いました推薦投票は1月28日、談話会員約10名の立会の下で開票しました。

総投票者数 104名 (内、4名連記の者 3票、1名のみ記入の者1票)
 開票結果は下記の如くであります。(31位以下省略)

この結果は原子核特別委員会に報告致しました。

順位	票数	氏名	順位	票数	氏名	順位	票数	氏名
1	51	園田正明	11	17	菊池正士	21	8	竹本茂雄
2	34	木村毅一	11	17	杉本朝雄	21	8	神原豊三
3	30	山口省太郎	13	15	木村一治	23	7	百田岩雄
4	25	田島英三	13	15	浅田常三郎	23	7	伊藤順吉
4	25	服部学	13	15	清水栄	23	7	荒勝文策
6	22	武田栄一	16	13	三輪岩雄	26	6	若槻哲雄
7	21	嵯峨根達吉	17	10	北垣敏男	26	5	宮本梧楼
7	21	武藤二郎	17	10	野中到	26	5	小川岩雄
7	21	山崎文男	19	9	向坂正勝	26	5	森田右
10	19	川崎栄一	19	9	弘田実弥	30	4	佐治淑夫

Ⅵ. 東大原子核研究所人事公募お知らせ

31年度新しく6講座が開設される予定です。下記により公募致します。核研設立の主旨等充分に御考慮の上、適任者の推せん及び希望者の応募をお願いします。

- 1 宛 先 東京都下田無町谷戸 東大原子核研究所 菊池正士
- 2 〆切期日 昭和31年2月25日
- 3 送 考 教授、助教授 2月末(28, 29日の予定)
助手 3月始(8, 9日の予定)

4 予定される席の数

	教授或は助教授	助手	計
a) 低エネルギー部門	3	2	5
b) 放射化学	1	1	2
c) 高エネルギー	3	3	6
d) 宇宙線	3	3	6
e) 理論	2	3	5

5. 各部門の仕事の内容及び見返し

a) 低エネルギー

31年度はサイクロトロン、同位体分離器の整備、核反応及び散乱装置の整備、 β 崩壊研究装置の整備。

32年度にはサイクロトロンが完成される予定です。上述の装置を整備しつつ研究を開始する。

b) 放射化学部門

31年度には放射性同位元素分離室の建設を行う。

32年度にはサイクロトロンによって作られた放射性同位元素を分離して、閃外に供給する業務のかたわら *Radio Chemist* としての研究に進む。

c) 高エネルギー部門

31年、32年の2ヶ年計画で、500~1000 Mev の *electron synchrotron* の建設に当る。この計画については INS-TH-5 を参照のこと。

d) 宇宙線部門

Air shower 及び原子核乾板による宇宙線の研究。

e) 理論部門

実験と密接に協力して原子核、中間子、宇宙線の研究に当る。

6. 提出書類

a) 応募の場合

希望する地位を明記した書類(助教授を希望するけれども人員の都合では助手でもよいとか助教授以上でなければ困るとか)、履歴書、発表論文リスト(事情の許す限り代表的論文の別刷数部)、最近2年間にした仕事の概要、推せん書3通(内1通は直接指導者のもの)、健康状態を知る資料。

但し教授の場合は簡単な経歴書と論文のリストだけでよい。

b) 推せんの場合

経歴書、論文リスト、推せんする地位、推せんの理由。

教授の場合は特にその代表的論文の簡単な紹介とその学問的価値について。

7. 在外の方々の応募、推せんもけっこうです。出来るだけ在外の方々に連絡をお願いします。その場合必要書類、期日等で多少の例外は致し方ありません。但し最近(夏ぐらいまでに)帰られることが確実であることが必要です。

8. 選考方法

例年に行います。助手の場合面接を行います。その時、自身の論文或は、他の人の論文を紹介していただくこともあります。

31年1月26日

原子核研究所長 菊池正士